

コロナ禍以後の対面授業に おける「ハイブリッド」な工夫 ―「アナログ」と「デジタル」な方法をめぐって―

庄子諒

東洋学園大学人間科学部専任講師

1. コロナ禍以後における問題意識の変化

私が非常勤講師としてはじめて大学の授業を担当したのは、2020年9月のことだった。その当時、授業運営として何よりも求められていたのは、新型コロナウイルス感染症の拡大にともなうオンライン授業への対応であり、いわば授業の「デジタル」化とその工夫であった。多くの教員は使い慣れていないオンラインツールの機能を手探りで活用し、なんとか学生との双方向性を確保していたと思う。15回の授業を乗り切ることでも精一杯だっただろう。

その後、2023年4月から専任教員として着任し、対面形式での講義を多く担当していくなかで、授業運営と

その工夫にたいする問題意識は大きく変化してきた。

コロナ禍でのオンライン授業の普及を契機に、デジタル端末を用いたさまざまなオンラインツールが大学全体で多く活用されるようになった。他方で、対面授業が再開されるにつれ、いわば従来の「アナログ」な授業形態にどのように戻していくかが、授業運営の悩みのひとつとなっていく。とりわけ、対面授業の経験自体が少ない学生が多い状況で、自分自身が学生時代に慣れ親しんでいたような従来の授業手法に戻すだけでは、もはや学生の参加を十分に促進できるとは限らない。コロナ禍以後、対面授業における新たな課題が生じたのである。

2. 「アナログ」と「デジタル」の特性

そうした問題意識を抱えながら、少しずつではあるものの、授業運営におけるさまざまな工夫を試している。そのなかで気づきつつあるのは、対面・オンラインにかかわらず、従来のアナログな方法、新たに取り入れられているデジタルな方法それぞれに、学生にたいして効果を発揮する局面があるということだ。互いを工夫して組み合わせることで、よりよい授業手法の開発が可能になる

のではないか。

たとえば、授業内の課題において、ワークシートやリアクションペーパーといった紙での提出と、LMS (Learning Management System) やオンラインツールを用いた提出とでは、学生の取り組み方やフィードバックの効果に違いが生じる。紙の場合、学生ひとりひとりの手によって時間をかけて書かれる文字や文章をとおして、それぞれの個性が読み取りやすいと感じる。そうした特性を生かしたフィードバックを行いたい課題内容では、紙の活用が望ましいだろう。他方、オンラインツールの場合、学生の回答がすぐに集計され、ビジュアライズされた結果をその場で提示でき、学生どうしが互いの進捗状況や理解度を同時に確かめあいながら課題に取り組める。これは、授業内で即時的なコミュニケーションを取り入れたい課題内容で活用することができる。

3. 「ハイブリッド」な授業をめざして

私がアナログにこだわって残していることのひとつが、毎回の授業終了時に提出するリアクションペーパーだ。これは今でも紙に書いてもらっている。一枚一枚の内容

をじっくり読み、疑問点や質問があれば次回の授業内容に積極的に組み込む。そして次回の授業の冒頭では、いくつかを匿名で紹介し、受講生全体にフィードバックする時間をしっかり設けるようにしている。

手書きのリアクションペーパーには、文字だけでなく図やイラストが書かれていたり、書き進めながら内容を漸進的に修正していることが読み取れる書き込みなどがあつたりと、学生の思考プロセスが深く読み取れる。1回の授業内での即時的な双方向性に限らず、そうした学生からのメッセージを読み取り、翌週の授業内容に反映させて応答する、いわば「スローな双方向性」のようなものが、アナログな方法の強みであり魅力なのではないかと感じている。

ほかにも、アナログ／デジタルを使い分け、組み合わせる工夫が可能であろう。授業内にさまざまな活動を取り入れることにもつながるため、学生の積極的な参加をより促進できる可能性もある。アナログ／デジタル、双方の授業手法を積極的に取り入れる「ハイブリッド」な工夫により、変化に富んだ柔軟な授業を行えるようになりたいと考えている。

日本女子大学建築デザイン学部 ・ 片山伸也「建築デザイン学科長」

建築でかなえられることのすべてを

はじめに

日本女子大学建築デザイン学部は、2024年4月に前身である家政学部住居学科を学部として独立させ、名称も変更した新しい学部である。大学院の修士課程である建築デザイン研究科も同時に設置した。

周知の通り、日本における建築教育は長く工学部の枠組みで行われてきたが、一方で美術や家政学（生活科学）の分野でもそれぞれの立場から建築に関わる研究・教育が行われてきた。いわゆる家政学の領域からの建築教育を担ってきた本学が、あえて家政学部から独立させて建築デザイン学部を設置した経緯と狙いを通して、日本における建築教育の課題を展望したい。

1 日本における建築教育の一系譜として

1901年の日本女子大学校創設当初から、家政学部では衣食住の一つである「住教育」が重視され、大正・昭和戦前期には近隣の早稲田大学からも佐藤功一や今和次郎じろうら教授陣を招聘しょうへいして専門的な建築教育を展開していた。しかし、女性が職業を持って経済的に自立することに対して否定的な社会的風潮もあり、職業人の育成にまでは至らなかったようである。

戦後の1948年に新制日本女子大学が発足すると、家政学部生活芸術科に住居専攻が設置され、以後、一期生の林雅子ら多くの女性建築家を輩出してきた。1962年に住居学科として独立して以来、60余年にわたって住生活学の教育と研究の一翼を担ってきた。

このたび、その伝統を継承しつつも改組し名称を変更するに至ったのには、学内外の大きな変化があった。一

つは、住居学科の扱う領域が拡大したことである。住生活学の視点に立てば、住宅にとどまらず、おのずと公共建築を含むあらゆる生活空間がその対象領域に含まれることは必然であり、1996年には他大学の工学部建築学科と同様に卒業後2年の実務経験で一級建築士の受験資格が得られる建築学コースが設置された。

もう一つは、他大学の建築学部化の動きである。もともと住居学科の学問領域には、生活文化と建物の関係やまちづくりのためのコミュニティ・マネジメントといった、ハードである建築に対してそこで展開する生活の分野、つまりソフトも含まれていた。しかし近年では、工学部建築学科においてもエンジニアリング的なアプローチだけではなく、人文学的な視点の重要性も指摘されるようになり、それが今日の建築学部開設ブームにつながっている。

2 総合学問としての建築学

建築学は工学だけでなく、歴史・文化といった人文学的要素も多分に併せ持った学際的な学術分野であり、欧

米をはじめとした世界各国では大学に建築学部として設置されていることが一般的である。日本においても2011年に近畿大学と工学院大学に建築学部が開設されて以来、工学系建築学科を改組して建築学部とする動きが加速しているように思われる。しかし、日本では長く工学部に建築学科が置かれ、家政系と美術系は少数派だった歴史が長く、いまだに建築学部＝理系と色分けする体質が根強く残っているように思われる。

実際に建築デザインに関わる学術的分野・領域を図示すると「図1」のようになる。構造や環境・設備、計画学



[図1] 建築デザインの学問領域

といった工学分野だけでなく、社会経済や生活文化、地域的また歴史的コンテクストといったさまざまな要素を統合する中で建築は成立している。従って、本学の建築デザイン学部のカリキュラムにおいては、早い時期から各分野の専門的な基礎に触れることを重視し、初年次から多くの専門科目を必修の基礎科目群として開講している。入学してすぐの高い就学意欲をそぐことなく、建築の専門家としての自覚を促すことを意図しており、いわゆる教養科目はその素養の上に立って学ぶことによって、より高い目的意識を持って学修することができるものと考え、初年次の時間割にあまり教養科目を詰め込まないように指導している。

3 建築教育のグローバル化

教育のグローバル化は今に始まったことではなく、また建築教育に限った話でもない。しかし、以前と比べて、大学間の国際交流や学生の留学がカジュアルになってきていることも確かであろう。かつての留学は、本国である程度学を修め、その上にさらに専門的知識を積み重ね



[写真1]設計の授業風景

るために、語学を習得し、特定の教授に師事するものであった。しかし、昨今では学部教育の一環として、その一部を海外の大学で学ぶようなスタイルの留学が増えており、それが世界的傾向のようだ。交換留学のための海外協定校の拡大が、どの大学でも喫緊の課題となっているのではないだろうか。

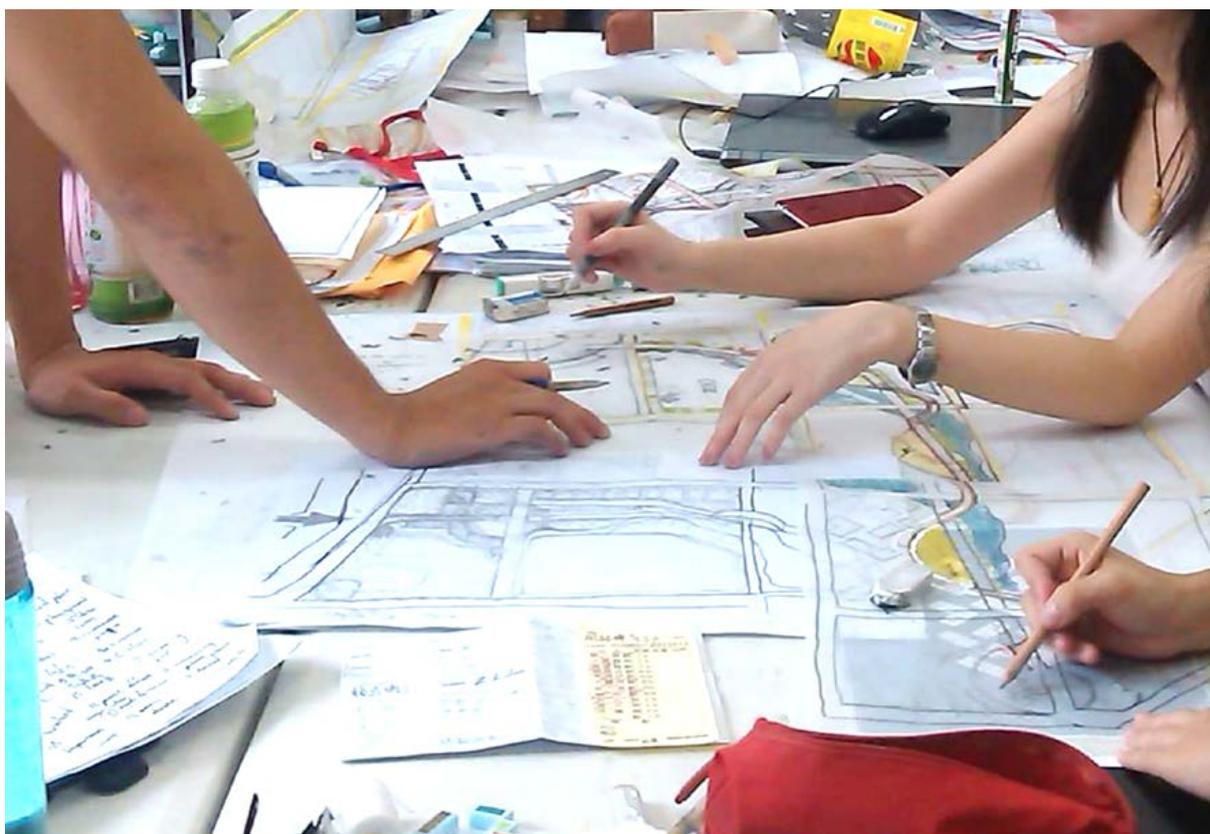
国際社会において、日本の建築文化は長きにわたって高く評価されてきた。モダニズム建築の新しい空間概念が日本の伝統的な建築空間と親和性が高かったことが大きな要因だったかもしれないが、モダニズムが終焉しゆうえんしてもなお、日本人建築家は世界から一目置かれる存在であり続けている。本学の卒業生で特別招聘教員である妹島和世氏の設計事務所にも、インターシップを希望する海外からの学生がひっきりなしにやってくる。日本の大学に留学を希望する学生も多いようだが、そこでネックになるのが語学であった。ヨーロッパ系言語を母語とする学生にとって日本語の習得は難しい。それが学部在学中の「カジュアルな」留学のためであればなおのことである。そこで、現在求められているのが英語の授業である。これには2つの意味があり、一つは留学生に対

して英語の授業を提供することなのだが、もう一つは日本人の学生に英語を習得させて留学に送り出すためである。協定校と相互に学生の交換が成立するために、改めてグローバルな共通言語としての英語の必要性が高まっている。

本学の建築デザイン学部も開設に当たって国際化をうたい、学科専門科目として建築英語を習得するための授業を設けた他、全学向けにもカジュアルな留学への精神的ハードルを下げるための英語開講科目（平易な英語による日本人学生向け科目）を開講した。これらの科目が、近い将来には留学生と日本人学生が一緒に受講する英語開講科目になることが望まれる。

4 コンピュータেশヨナルデザイン

建築教育の国際化において、英語以外にもう一つ必須の能力となりつつあるのが、コンピュータেশヨナルデザインコンピュータেশヨナルデザインの技術である。建築の設計のアイデア出しから施工まで、一連のプロセスをコンピュータが提供するプラットフォーム上で一貫して実現してしまうこの分野では、アイ



[写真2]国際ワークショップの様子

デアの検討もすべてコンピュータ上のモデリングによって進められる。そのためアプリケーションに精通していることが求められるようになってきているのだ。国際ワークショップや留学先の学生同士で共同設計をするとき、海外の建築設計事務所でのインターンシップを行うときなどに、共通言語としてのコンピュータスキルが必須となってきたり、本学の新学部においてもコンピュータデザイン科目を増やして充実させた。もはや模型を作らない欧米の設計事務所も多いと聞く。

しかし、元来日本人は手先が器用だからか、建築デザインの検討においては模型を作ることがいまだに主流であるように思われる。教育の現場でも学生たちには模型を作ることを推奨している。

模型を作らずにコンピュータ内でモデリングをするところが国際的潮流であるならばピックアップしなくてはならないのかもしれないが、そうやって世界中の建築教育が均一化していくのに流されることが日本の建築教育の戦略として正しいとも思えない。日本人の建築家が世界的に高く評価されているのと同様に、日本の建築教育も独自のメソッドを実践することは、国際的な日本のプレ



[写真4] 学生による団地のリノベーション計画(実施案)



[写真3] 造形の実習風景



[写真5] 構造実験の様子

ゼンスを示す上で重要であろう。

5 建築デザインが目指すもの

家政学の一分野として位置付けられた「住居学」が当初扱っていたのが、住生活やその箱としての住宅の設計であったことは否めない。しかし、女子は理系科目が苦手であるというような先入観から、これまで工学部系建築学科を前提とした建築教育から女性が遠ざけられていたとしたら、それは大きな社会的損失だったと言える。その意味においては建築学部化の流れは、無意味な理系・文系の区別を払拭することにつながるだろう。これまで「住居学科」の名の下に矮小化わいしょうされてきた本学にとっても、分野名称をそろえることのメリットは大きい。

一方で、本学の学部名称を「建築学部」ではなくあえて「建築デザイン学部」としたのは、形ある建築を通して人と人、人と環境をつなげ、私たちの生活を豊かにするというデザインの本質を強調するためであり、家政学部生活芸術科をルーツとするわれわれの矜持きょうじでもある。